

暴力チアリーダー

Cheerleader's Brutality by Femvenger



1 土曜日の午後

リックとマイクは、いわゆる悪徳警官だった。

ともにプエリトリカン。背は高くないが、でっぷりと太り、頭ははげ上がっていた。

市民の安全を守るのが義務だなんて観念は、彼らの頭にはこれっぽっちもなかった。彼らの頭にあるのは、些細なことで市民を恐喝し、金を巻き上げることばかりだった。二人の妻は、とっくに暴力亭主に愛想をつかして逃げていた。

もちろん、所轄警察署の警官たちは、リックとマイクの悪行を知っていたから、二人にコンビを組ませることはしなかったが、週末の非番の日は別だった。土曜日の午後になると、二人はつるんで不法を働きに街に出た。

やんちゃで活発なティファニーとローリーは、常に活動の場を求めている。リンカーン・ハイスクールでも一、二を争う美少女の二人は、チアリーダーークラブで、サブグループのキャプテンを勤めていた。

ローリーは身長175センチ。94センチのDDサイズのバストに、長い脚。長い髪をポニーテールにしていた。

ティファニーは、160センチそこそこだが、筋肉質の引き締まった体に、89センチの豊かな乳房、髪の毛は左右で結んでいた。

二人とも、ブロンドの髪にブルーの眼。健康的な、いかにもアメリカ娘な十六歳だったが、二人は決して純白な天使ではなかった。校門に向かって歩きながら、二人は昨夜、フットボールチームのスターであるボーイフレンドと、どんな夜を過ごしたか、お喋りしあっていたのだ。そもそも、二人がロッカールームに戻ってきたのは、そこで人目につかぬようにビールを飲み、ローリーが大学生の姉からもらったマリファナを楽しむためだったのだから。もちろん、二人はハードコアなドラムカーでも、ジャンキーでも、インフオマニアでもなかった。ごく普通の、平均的なアメリカ娘にすぎない。

その日、リンカーン・ハイスクールに近い道路を、犠牲者を物色しつつゆつくりと車を走らせていたリックとマイクは、白と赤のチアリーダー・スタイルの二人の美少女が歩道を歩いているのを目にし、ブレーキを踏んだ。

その日、ティファニーとローリーはフットボールの試合の応援を終えて、学校に戻ってきたところだった。二人はキャプテンだから、専用ロッカールームの鍵を持っていた。

二人の警官は、互いに目を合わせ、同じ思いつきを抱いているとすぐに察知した。彼らが高校に在籍していた頃は、チアリーダーたちからはハナから相手にされなかった。

今こそ、昔の恨みを晴らすチャンスだ！

リックとマイクは、思わぬ幸運に有頂天だった。学校はすでに閉まっていて誰もいない。高い塀が悲鳴が外に漏れることを防いでくれる校舎の中に、二人のティーンエイジ・ガール。まさに、皿に載せて出されたケーキだった。

マイクは、バッグから金属の器具を取り出し、いま少女たちが消えた学校の門の鍵を外しにかかった。

「警官よりも泥棒になるべきだったな」

マイクは呆気なく開いた扉を指さして自慢たらたらだった。

「もつと金を稼げたぜ！」

「でもよ、今から、銀行の大金庫から大金かっぱらうよりも……」

リックがにたにた笑った。

「もつといいことするんだぜ！」

二人の悪徳警官は卑猥に笑った。

学校の廊下を歩いていると、少女たちのお喋りが聞こえていた。少女たちは、ロッカールームの鍵が掛かっていることに安心しきっていた。

「なに、あんたたち！」

マリファナを回し飲みしていた二人の美少女は、乱入してきた警官たちに、声を揃えて叫んだ。

「おい、何を持ってるんだ？」

マイクが言った。

「可愛い顔して、いけないねえ。どうするよ。情状酌量の余地、あるか？」

「そうさな」

リックが、ティファニーの手からマリファナを奪い取り、二人の美少女の発達しきった乳房や、引き締まった四肢を眺めて舌なめずりしながら応じた。

「俺たちの言いなりになるなら、見逃してやってもいいけどな」

「冗談じゃないわよ！」

ティファニーが叫んだ。

「私たち、男には困ってないの！　なんで、あんたたちみたいなデブのおっさんを相手しなきゃなんないのよ！」

警官は二人ともすでに四十歳近く。十六歳のチアリーダーにとっては、博物館に陳列されている

る原始人の模型も同然だった。

警官たちは逆上した。彼らに恐喝された市民はみな、平身低頭して許しを請うた。だが、このプロンドの小娘たちは、彼らの権力に屈しない。それどころか、侮辱すらした。

二人の警官は、欲情を催すと街娼の取締りに行く。娼婦たちは渋々、彼らの求めに応じて見逃してもらっていた。

二人は悟った。彼らが初めて強姦する相手は、この二人の生意気なチアリーダーたちだと。

リックは警棒を腰から抜いてローリーに迫った。

「ブルネットだったら、もっとよかったのにな……」

「ふん、この素チン野郎！」

ローリーは叫んだ。

「自分のペニスで鉛筆並だからって、そんな太い棒ちらつかせて、何しようつてのよ」

少女たちは、ここで何をすべきか分かりきっているようだった。そして、この二人が、街じゅうのみんなが嫌がっている悪徳警官コンビだということも知っていた。二人は容赦なく、行使すべき正義を行使する決心をすでに固めていたのだ。

一方、マイクは、小娘たちがちっとも自分たちのご威光を恐れていないことを訝っていた。彼

は怒鳴った。

「おい、わかっているのか？ 俺たちは警察官だぞ！」

「へええええ〜」

ティファニーが嘲るように言った。

「警察官なのは、あんたたちの制服だけよ。この、馬鹿！ デブ！ ハゲ！ ジジイ！ 短小！」

警官たちは、少女たちが脅しに屈しないことにますます逆上した。今や、男の物理的な力によって、少女たちを屈伏させるべき時が来たと悟った。

二人の警官は、警棒を振りかざしながら少女たちに迫った。マイクはティファニーに、リックはローリーに。

警官たちの不運は、リンカーン・ハイスクールのチアリーダーたちは、ただ男の子たちを応援するだけの存在ではないことを知らなかったことだ。彼女たちは、フィジカル・トレーニングを欠かさなかった。そして、ハイスクールの男の子全員からの称賛を浴びる二人は、警官の肩書など恐れなかった。彼らは自分たちをレイプしようとしている。とるべき行動はただ一つ。

マイクは、唇を嘗めながら左手を伸ばし、ティファニーの右の乳房をつかんだ。

その瞬間、ティファニーの脚が動いた。彼女の左の膝が、マイクの睾丸を直撃した。彼が反応する寸前、彼女の右脚が跳躍し、彼の右手にもった警棒を撥ね飛ばし、空中で一回転したそれを受け止めた。

マイクは苦痛に呻き、膝をついた。彼の右手は、蹴り上げられた睾丸を抑えていた。

リックは、相棒がティファニーに手もなくやられてしまったのを見つめながら、呆然と馬鹿面をさげていた。ローリーは、素早く彼の手から警棒を奪いとった。リックが彼女のほうを向いた瞬間、ローリーは警棒で彼の面を殴りつけた。リックの口から血と折れた歯が吹き飛んだ。リックは、血が迸る口を抑えて膝をついた。

「てめえ！」

リックは腰の銃に手をやって叫んだ。

ローリーは、素早くその腕に警棒を叩きつけた。

ティファニーは、警棒の革紐を手首に巻き付けながら、叫んだ。

「ローリー！ ナンバー4、やるよ！」

ローリーは瞬時にティファニーの言葉を理解した。自分たちのチームが勝ったときに行うバトングームだった。ローリーはすぐに奪い取った警棒の革紐を手首に巻き付けた。二人の少女は、警棒をすごい勢いで回転させた。二人は、警棒の有効な使い方を、警官たちよりも熟知していた。

少女たちの警棒の回し方が早すぎて、警官たちは、いつ、それが自分たちに飛んでくるのか見当もつかなかった。ただ、骨まで響くような痛撃だけを感じとるだけだった。わずか十秒の間に二十の痛撃を浴びた。顔に、腕に、脚に、膝頭に、向こう脛に。

警官たちは、膝をついたまま、悲鳴をあげるのみだった。

やっと彼らが立ち直り、怒りの咆哮をあげて逆襲に転じようとしたとき、ローリーが叫んだ。

「今度はナンバー2よ！」

二人はいったん警棒を空中に放り上げ、地面すれすれにキヤッチし、警官たちの股間めがけて突き上げた。

警官たちは仰向けにひっくり帰り、苦悶の呻きをあげ、両手で股間を抑えて床を転がりながら悶絶した。

起き上がることもできないでいる警官たちの滑稽な姿に、二人の美少女は顔を見合せ、吹き出した。

「簡単だったねえ」

「うん。男なんて、金玉狙えばいちころよ」

ふと、ティファニーが、「そうそう、銃を貰っておかなきゃ」と言った。二人は、警官たちの

ベルトから9ミリ経口のベレッタを抜き取り、自分たちのベルトに差し込んだ。ふと見ると、ベルトには手錠がぶらさがっていた。二人の少女は手錠を奪い取り、警官たちの靴とソックスを脱がせた。それから、右の手首と右の足首を、左の手首と左の足首を、手錠をはめて固定した。

いまや二人の悪徳警官は、両手を後ろ手に足首に固定され、海老ぞりになって悶絶していた。

少女たちは、警官のポケットを探った。なかには、現金が千ドルに、夥しい鍵束が入っていた。

ナイフもあった。少女たちは、そのナイフで警官の服を切り裂き、全裸にした。

「あんたの言ったとおりね！」

ティファニーが歓声をあげた。

「ほんとに鉛筆並みじゃん！」

彼女は、警棒でマイクの唇を撫でた。

「女をレイプするときは、自分たちのじゃちっちゃすぎて役に断たないから、警棒を使うんじゃないの？」

二人はウインクしあった。長年の親友だった二人は、言わなくてもお互いに何を考えているかすぐに理解しあえた。

「悪い警官にお仕置き！」

二人は、男たちを腹這いにして、尻を何度も警棒で殴りつけた。

警官たちは、もはや息も絶え絶えだった。彼らが、市民を迫害するのにさんざん使ってきた警棒は、いまや、彼らの肉体を責め苛んでいた。しかも、彼らが警官になったときにはまだ生まれてもいなかった小娘たちなのだ。

「ねえねえ、おまわりさん」

ローリーは、親友にウインクしながら言った。

「お望みどおり、気持ちいいことしてあげようか……あなたたちの玩具で！」

警官たちは、もはや抵抗の手段を奪われていた。少女たちは、頬を上気させながら、警棒を、それぞれの警官の肛門に突っ込み、深くねじこんだ。

警官たちは、凄まじい苦痛に悲鳴をあげた。だが少女たちは容赦なく、深く深くねじこんだ。警官たちの苦痛の呻きと並行して、サディスティックな愉悦に興奮した少女たちの喘ぎもまた、音量を増していった。

「やっちゃえ！ やっちゃえ！ やっちゃえ！ やっちゃえ！」

彼女たちは、フットボールの観客席で「リンカーン・コール」を唱えるように囃したてながら、警棒をぎりぎり限界まで突っ込んだ。

数分後、少女たちは警官たちの肛門から警棒を引き抜いた。

「うわっ汚い！」

ティファニーが叫んだ。警棒は、警官たちの血や、体液まみれだった。

「綺麗にしな！」

少女たちは、警棒を警官たちの口につっこんだ。彼らは愚かにも、口を閉じた。しかし、少女たちは構わずに突っ込んだ。歯が何本も砕け、警棒は喉まで突き通った。

少女たちは、警棒を警官たちの口に突き刺したまま、立ち上がった。

「さてと、あなたたち、刑務所行きは確実ね」

ローリーがあざ笑った。

「悪徳警官が、刑務所で他の囚人から、どんな扱いを受けるか、知ってる？ たぶん、あなたたちが送り込んだ囚人もいるでしょうね。すっごい報復を受けるわよ」

「抗議もできないんじゃない？」

ティファニーも笑った。

「歯無しだからさ、何言ってるか、たぶん伝わらないよ」

「ティファニー、見張ってて」

ローリーは、警官から奪った鍵束を振り回して言った。

「こいつらの車、のぞいてくる！」

ローリーが立ち去るやいなや、警官たちはティファニーを見ながら、何度も頭を下げ、哀れみを請おうとした。彼は必死で言葉を発しようとしたか、警棒が突き刺さっているために、言葉にならなかった。

ティファニーは、二人の口から警棒を引き抜いた。二人は口々に何かわめいた。わめく度に、彼らの口から血と唾が飛んだが、言葉は不明瞭なままだった。

「うるさい！」

ティファニーは、警官たちの拳銃を、次々と警棒で殴った。警官たちは絶叫し、海老ぞりの姿勢のまま、転げ回った。

「静かにしないと、叩き潰すわよ！」

ティファニーは、再び警官たちの口に警棒を突っ込んだ。

警官たちは、滝のように涙を流し、嗚咽を漏らすばかりだった。

その間、ローリーは駐車場で彼らの車を探した。探し当ててから、用心深く周囲を見回し、誰もいないのを確認すると、車に乗り込んでキーを押し込み、発進させた。

彼女は、車を学校の裏手の林の中に隠した。無人のパトカーを発見した他の警官が怪しむのを避けようとしたのだ。

ローリーはもちろん無免許だったが、車の運転はお手のものだった。

樹木に囲まれたなかに車を停車させると、ローリーは車内を物色した。番号が並んだノートが見つかった。何を意味するかは分からなかったが、なんだか怪しげだった。さらに、携帯用の無線機器が二つと、何本かのぶつとい葉巻が見つかった。彼女は、それらをみな、車から持ち出し、ロッカールームに戻っていった。

ローリーが戻ってきたとき、ティファニーはちょうど、警官たちの口に警棒を突っ込んでいるところだった。

ローリーはティファニーに葉巻を一本渡した。二人は警官のナイフで口を切り、火をつけた。白と赤のチアリーダー・コスチュームを身につけ、腰にベレッタを差し込んだプロンドの美少女たちは、葉巻の煙を吐き出し、彼らの顔にふきつけた。二人の警官は苦しげに咳き込んだ。

「いけるじゃん、これ！」

ティファニーは、彼女たちの倍以上の年齢の警官たちに煙を吹きつけながら言った。

「あんたたちにも味わわせてあげてんのよ。ありがとうって言ってほしいよね」

言いながら彼女は、葉巻の火をマイクの尻に押しつけた。

「だめよ、ティファニー！」

ローリーが言った。

「火が消えちゃうじゃない。そんなとこじゃなくて、もっと違うとこ、焼いてあげようよ」

「そうね、ローリー」

ティファニーが答えた。

「あんたって、頭いい！」

リックは、必死で口を動かし、許しを請うた。

「え、なに？」

ローリーがリックの口許に耳を近づけた。リックは必死で口を動かしたが、歯が抜けて閉まったため言葉にならない。

「え、なにに？……許して？ ばっか言ってるじゃねーよ」

ローリーは、リックの睾丸を蹴りつけた。リックは悲鳴をあげた。つづいてティファニーもそれにならった。警官たちは、腹這いになつてくずおれた。

二人は葉巻の火を、警官たちの肛門に押しつけ、警棒で深く押し込んだ。男たちは、下腹部の内部に巻き起こった新たな激痛に、絶叫した。

二人の十六歳の美少女は、四十歳近い粗暴で醜悪な面つきの男たちが、もがき苦しむ様に、残忍な哄笑を浴びせた。男たちがもがけばもがくほど、葉巻も警棒も深く深く下腹部に突き刺さり、ますます苦痛が増幅していくのだ。警棒が1インチずつ男たちの体内に沈んで行く度に、チアリーダーたちは手を叩いて喜んだ。

「いい眺めじゃん！」

ティファニーが叫んだ。

「もっと楽しみたいけど」

ローリーがふと時計に目をやって言った。

「そろそろ時間よ」

「そうだった」

ティファニーも残念そうだった。二人とも、これから別のボーイフレンドたちとデート「じゃ、一服してから、行きますか」

二人は、ハンドバッグから煙草を取り出して火をつけた。

二人の警官は、十六歳の少女たちが法律を犯して喫煙するのを見る余裕もなく、屈辱に嗚咽し、激痛に悶えるばかりだった。

「じゃあ、私たち、いくね」

ローリーが言った。

「でも、明日また来る。それまでここでおとなしくしててね」

ローリーは、彼らから奪った拳銃をハンドバッグに押し込んだ。ティファニーは、携帯用無線機器を取り上げた。

「明日までよつく反省するのよ。もし、今後、リンカーン・ハイスクールのチアリーダーをレイ

プしようなんて考えたら……」

ティファニーは、両手で二人の睾丸をつかみ、ひねりあげた。男たちは大きくのけぞり、痙攣した。

「金玉、二つとも潰すわよ！」

悶絶する男たちを、天井から床を貫くパイプに固定し、ロッカールームに放置したまま、少女たちはスキップしながら外へ出て、錠をかけた。無人の建物内には、男たちの号泣と、少女たちのお喋りの音が響いた。男たちの体内では、まだ葉巻が燃えていたのだ。

その夜、ティファニーとローリーは、生涯でもっとも素晴らしいセックスを楽しんだ。一晩中愛欲を貪って体を動かす彼女たちに、ボーイフレンドたちはなされるがままだった。その間も彼女たちは、次の日のプランを頭のなかで練っていた。空想がますます、彼女たちを欲情させた。

2 日曜日の午後

チアリーダーたちは、今度は目立たないように、ジーンズとブーツで学校に戻ってきた。喜ぶべきことに、警官たちの車はまだ裏手の林のなかにあった。

悪徳警官たちは、まだパイプに手錠でくくりつけられたままだった。失神していた。床には垂

れ流された小便が溜まっていた。

ティファニーとローリーはくすくす笑い、警官の口から警棒を引き抜き、肛門に突っ込んだ。

すでに、彼らの体内に火傷の跡を残した葉巻の火は消えていたが、警棒に押し広げられた坑内から、灰が落ちた。二人は苦悶の呻きをもらし、目を覚ました。

グラマラスな金髪の美少女たちは、パイプにくくり付けられていた手錠を外し、二人を床に転がした。足首の手錠も外した。今やそんなものが必要もないほど、二人の男たちは弱り果てていた。

「床汚しちゃって！」

ティファニーが叫んだ。

「きれいに嘗めな！」

二人の少女たちは、男たちの顔を床に溜まった黄色い液体に押しつけた。

ひとしきり屈辱を味わせた後、少女たちは二人を向かい合って立たせ、脚を開かせた形で、彼らの足首と足首、太股と太股を用意したゴムテープでぐるぐる巻きにした。

彼らの睾丸が互いにくつつきあったまま情けなくぶらさがった。

「ま、待ってくれ！」

マイクが弱々しく言った。

「わ、悪かった。金ならいくらでも出す。逮捕もしない。だから……助けてくれ……」

「なくに言っただか♪」

ローリーが歌うように言った。

「あんたたちのお金なんか欲しくないもん。それに、助けてなんかあげないよ。逮捕しない？ 私たち、逮捕される気なんかないもん。でつきるわけないじゃん。こんなかつこでさ」

「そうそう」

ティファニーが言葉を添えた。

「まだ終わってないの。まだまだ、あんたたちで遊んでやるんだもん！」

言いながら、ティファニーは二人の睾丸をつかみ、ひねりあげた。男たちは身悶えし、泣き叫んだ。

「やるじゃん、ティファニー！」

ローリーは拍手して喜んだ。

「じゃ、手始めに、互いに抱っこしあって」

男たちは、ティファニーに急所をひねりあげられ、絶望的な悲鳴をあげながら、必死に互いの体に両手をまきつけた。

「そんな、生温い抱っこじゃなくて！」

ローリーは指示を出した。

「ちゃんとぎゅっと抱っこしあうの！」

男たちは従った。少女たちは、彼らの腰や胸や首もガムテープでぐるぐる巻きにし、しっかりと固定した。

「さてと、おまわりさん。今度はキスして！」

ローリーが命令した。二人の警官はぎよつとして逡巡したが、ティファニーは容赦なく、二人の髪の毛をつかみ、顔を押しつけあわせた。

「だめだめ！ ディープキスするの！ ちゃんと舌を入れてね！」

二人は涙を流しながら、命じられたとおりにするしかなかった。少女たちは、今度は頭部をぐるぐる巻きにした。二人は唇を押しつけあつたまま、息が詰まりそうだった。

「当然の報いよ」

ティファニーが宣告するように言った。

「女の子をレイプしようとしたんだもの。あんたたちを警察に引き渡してもいいけど、絶対に隠蔽工作するに決まってる。このノート、怪しい番号がたくさん書かれてるけど、これも闇に葬り去られるでしょうね。だから、ここで、私たち自身であんたたちを裁いてやる。もう二度と、この町の女の子たちがあんたらの毒牙にかからないように。そして、あんたたちに惨めな後半生を過ごさせるように！」

少女たちは、左手で縛られた男たちを壁に押しつけ、右手に警棒を持ち、彼らの爪先に打ち込んだ。男たちは激しく痙攣したが、少女たちは容赦しなかった。彼らの足指の骨はことごとく砕けた。彼らの断末魔の悲鳴は、びったりと合わさった唇のなかで反響しあうのみだった。

「まだまだ、こんなもんじゃないわよ！」

ローリーが言った。

美少女たちは、警官たちのガムテープを剥がし、ロッカールーム内のトイレに引っぱり込んだ。二人の顔を便器に突っ込み、水を流しながら、彼らの両手に手錠をかけ、水槽と便器をつなぐパイプに固定し、逃げられないようにした。そして、彼らの背中にガムテープで文字を張りつけた。

「麻薬をやつてます。検査をお願いします (TEST US FOR DRUGS)」

そして、ノートをトイレのドアの前に置いた。

「さてと」

ローリーはティファニーを見て、言った。

「二度とこいつらが悪いことできないようにしましょう」

ティファニーは邪悪な笑みを浮かべて頷いた。

二人は、警官たちの陰囊のつけ根をガムテープで縛った。腫れ上がった睾丸が今にも陰囊を張り裂きそうだった。

美少女たちは、陰囊のつけ根に紐をくくり付け、無線機器と拳銃を垂らした。陰囊は、その重

みでいまにも引きちぎれそうだった。

ティファニーとローリーは、満足そうに煙草に火をつけ、しばしくゆらせた。

「今夜は二人とも、眠れなくなりそうね」

「そのとおりよ、ティファニー」

ローリーは笑い、警官たちを向いた。

「じゃ、おまわりさん。私たちスクールガールの特別講習第二段よ。あんたたちが二度と、警察権力の横暴とやらを行使できないようにしてあげる。リンカーン・ハイスクールのチアリーダーのやり方で、もう二度と、女の子をレイプしようなんて考えることもできないよう、徹底的に傷めつけてあげる」

「私たちを訴えても無駄よ」

ティファニーもせせら笑った。

「そんなことしたら、あんたたちが私たちにレイプしようとしたこともばらしてやるから。第一、大の男が、しかも訓練された警察官が、十六歳の女の子に叩きのめされたなんて、誰が信じるの？ 私たちはただ、シラを切りつづけなければいいだけ。そのくらいのお芝居は、私もローリーもお手のものなんだから」

警官たちは、便器に顔を突っ込んだまま、抗弁する気力もなく激痛を堪えていた。ティファニーとローリーは、大きな胸を揺すって笑った。

「じゃ、いこうか」

ローリーは、ロッカールームのCDプレイヤーのスイッチを入れた。軽快なヒップホップの音楽が流れた。二人のチアリーダーたちはそれぞれ警官たちの背後に立ち、音楽に合わせて脚を撥ね上げた。爪先が、あやまらず彼らの腫れ上がった睾丸を襲った。警官たちは苦痛に身を振り、脚を閉じようとしたが、陰囊にくくりつけられた拳銃と無線機器が挟まっているので、ぴつたりと閉じることはできなかった。

美少女たちは歓声をあげ、睾丸を蹴り続けた。睾丸は充血し、陰囊が破裂しそうになるまで膨張した。

警官たちは、もはや泣きわめく気力もなく、激しく痙攣しながら地獄の睾丸責めを浴びせられつづけた。やがて二人は便器に血反吐をはき、失神した。

翌日、警官たちは学校の事務員によって発見された。

ティファニーとローリーが登校してくると、校門にはテレビや新聞の記者やカメラマンの人だかりができていた。やがて、二人の警官がストレッツチャーに載せて運び出されてきた。顔しか見えなかったが、土気色で恐ろしい苦悶の表情が浮かんでいた。

事態は美少女たちが望んだとおりに推移した。

警官たちの睾丸は完全に潰れ、足指はすべて砕けていた。二人は満足に歩くこともできない身となった。娼婦たちを脅して満足させてきた生殖器は使い物にならなくなった。

寒くなる度に、足指のなくなった爪先や、睾丸を除去された股間がしくしく痛み、二人は美少女たちから受けた恐ろしい責め苦の記憶に苛まれることになった。

まさに、彼らが多くくの女性たちに与えてきた暴力の報いだった。

さらに、警官たちの別の犯罪が明るみになった。美少女たちが予想したとおり、二人は麻薬検査の結果陽性と診断された。マリファナだけではなく、コカインやLSDまで使用していたことが判明したのだ。

さらに、彼らのノートに書かれた番号は、彼らが密かに見逃してやった麻薬の売人たちのリストだった。売人たちの麻薬売買を黙認するかわりに、彼らから無料でドラッグをもらい受けていたのだ。売人組織は壊滅した。

マイクとリックの「災難」はそれで終わらなかつた。彼らの映像がテレビニュースや新聞記事に登場すると、二人から被害を受けていた一般市民たちが次々と口を開いた。二人が行ってきた恐喝が白日の下にさらされた。さらに、マイクとリックに脅されて、無料で体を提供しなければならなかつた多くの娼婦たちも、彼らの所業を証言した。彼らの前妻たちも、彼らがいかに家庭内で横暴な亭主だったかを告白した。地元のタブロイド紙が、二人の悪徳警官の罪業を面白おか

しく書き立てた。

二人を庇う人間は誰もいなかった。所轄警察署は、世論に迎合して二人を懲戒免職に処し、裁判所に送り込んだ。

一方、二人に再起不能の重傷を迫せた犯人について、警察署長はこう発表した。おそらく麻薬売買のトラブルがもとで、プロフェッショナルな犯罪者によってリンチを受けたのであろう、と。

このニュースを聞いて、ローリーとティファニーは笑うしかなかった。警察は、「プロフェッショナルな犯罪者」が、実はチアリーダーのユニフォームを身につけた十六歳のスクール・ガールであることを果して知らなかったのだろうか？

リックとマイクの弁護士は、刑罰の軽減を申し立てたが却下された。二人は懲役 60 年を言い渡された。

ローリーとティファニーは、ローリーの姉が住んでいるマンションの一室で、マリファナをくゆらしながら、そのニュースをテレビで見た。

「あんな悪人どもを一生刑務所から出られないようにしてやったんだから、私たち、表彰されて当然よね」

ローリーが笑った。

「正義は勝つ、よ」

ティファニーは言った。

「60 年かあ……長いよねえ。一生、囚人たちの慰みものになるなんて、ぞつとしちゆうけど、悪が栄えた試しなし、よね」

「神よ、アメリカに栄光を」

ローリーは呟いた。ティファニーが結んだ。

「そして、リンカーン・ハイスクールの正義の女神たちにも」